

眉をあくれば

秋田県立雄物川高等学校
校長室だより 第2号
平成29年6月6日(火)
文責 信田 正之

挨拶の心

本校に赴任して2ヶ月がたちましたが、多くの方々から「雄物川高校の生徒は挨拶がいい」と言われます。これはもちろん、毎朝玄関に立って指導する先生方の努力の賜であることは言うまでもありません。しかし、ただ挨拶するだけなら、それはどの学校でも見られる光景です。では、本校生の挨拶のどこが優れているのでしょうか。

遡って、私が赴任してきたばかりの4月の話です。玄関先に立っていると、登校してきたある生徒に、「今日は天気がいいですね」と声をかけられました。ほかの生徒は口々に「おはようございます」と挨拶して通り過ぎていく中、それは異質とも言える言葉でした。しかし、私はなぜかその言葉に強く心を惹かれました。その日は久しぶりに天気がよく、陽の光が肌に当たって心地よい朝でした。生徒はいつになくすがすがしい気分で登校し、心地よさを誰かと共有したかったのでしょうか。もちろん、私も生徒と同じように晴れやかな気持ちでいましたので、迷わず「本当だねえ」と応えていました。しかしその瞬間、私は「おはよう」だけでは意識できない「心のつながり」を強く感じました。「天気がいいですね」という言葉が、私を暖かく迎え入れてくれる歓迎の挨拶のように聞こえたのです。その日を境に、私はすべての生徒との距離が縮まったように感じています。

またこれは最近の話ですが、夕方、帰宅しようと車に乗り校門から出た直後、同じ方向に歩いていたある生徒を追い越しました。すると、驚いたことに通り過ぎる瞬間、車外から「お疲れ様でした」という元気な声が聞こえてきたのです。もちろん、挨拶してきたのは、私が追い越した生徒ですが、普通であれば私に気付かないか、気付いたとしてもそのまま何も言わずに通り過ぎてしまう状況です。感心したのは、まず、車を運転しているのが私だと気付いたこと。そして、通り過ぎてからでも挨拶してくれたこと。さらに、車の中まで届くように大きな声で挨拶してくれたことです。一日の勤務を終え、やや疲れぎみの私にとって、その挨拶は何よりの癒やしの言葉でした。そして、その生徒の気配りや思いやりに、私は心から感激しました。

本校の生徒とはいろいろな場面で挨拶を交わします。でも、よくよく考えると、本校の生徒はどんな体勢でいても、挨拶するときには必ず向き直って私の目を見てくれます。相手の目を見るのは、単に言葉だけではなく心を伝えようとしている証拠です。本校生の挨拶が優れているのは、相手との共感や相手への思いやりを伝えようとする心が、一人ひとりに備わっているからではないでしょうか。「挨拶は言葉ではなく心なのだ」と、本校の生徒から改めて教えられたこの2ヶ月でした。